

# 「新聞よりも恋しい」男

— Charles Dickens と W. H. Wills の関係について —

渡 部 智 也\*

## 1. はじめに

Charles Dickens にとって、親友と呼び得る人物は誰か？この問いに対して多くの研究者は John Forster だと答えるであろう。Dickens と同年のこの男は、Dickens の作家人生の初期から彼を支え、彼が作家として大成する道筋を作った人物であり、最初の重要な Dickens 伝を書いた人物でもある。その中にも記されているとおり、彼は家族を除いて最初に Dickens の暗い過去、すなわち幼少期に労働者階級の子弟に混じって靴墨工場で働かされたという事実を知らされていた人物でもあり、そのことから両者の密な関係性を窺うことができる。宮丸裕二氏は両者の関係について、“[H]e was Dickens’s Boswell” (2) と述べているが、それは多くの批評家の頷くところであろう。また 21 世紀に新しい Dickens 伝を執筆した Claire Tomalin は、講演の中で「自分の伝記の目的の 1 つは Dickens の人生における Forster の重要性を再評価することだ」(Tomalin, Lecture) と述べ、実際にその伝記では、作家 Dickens を作り上げる上でいかに Forster の存在が大きかったかという点を強調している。

ところが 1850 年代以降、Dickens と Forster との関係には微妙な変化が訪れる。両者の中が険悪になった、というわけではないが、かつての親密さが見

---

\* 福岡大学人文学部准教授

られなくなっていくのである。そのような流れの中で、Forster に代わって存在感を増すのが W. H. Wills である。初め雑誌の編集長 Dickens の元で秘書や副編集長を務めたこの男は、徐々に Dickens の信頼を勝ち得ていき、ついには Dickens と愛人 Ellen Ternan との手紙のやりとりに関与するまでに至る。この Wills について、Forster は前述の伝記の中で、“Dickens's later life had no more intimate friend” (2: 81) と述懐している。この言葉は2つの点で非常に示唆に富んでいる。1つは言うまでもなく、Wills が後年の Dickens にとって親友と呼べる人物であったということであるが、それと同時に、「彼以上の人はいない」という表現から、Forster 自身は Dickens と以前の親密さを保っていないという事実が窺えるのである。<sup>1</sup>

Dickens と Forster は終生の友であり、晩年も Dickens は事あるごとに Forster に手紙を送り、相談事を持ちかけていた。それでも、彼らの関係が以前と全く同じとは言えないこともまた事実である。いったいなぜ Wills は後年の Dickens にとって最重要な存在となることができたのだろうか？ Wills には、Forster にはないどのような能力があったのだろうか？ 本稿の目的は、Dickens と Wills の関係を主に Forster との比較を通して再検討し、彼の人生における Wills の重要性を考察することである。結論を先取りすれば、Wills が後年の Dickens の親友となり得たのは、彼が Forster にはない能力を持っていたからではなく、いささか逆説的ではあるが、Forster の持つ、ある能力を

---

<sup>1</sup> ただし、「彼以上の人はいない」、という表現には注意が必要である。というのも、後年の Dickens の交友関係にはもう一人重要な人物として、Wilkie Collins の名が挙がるからだ。後述するように、この Collins との交際が Dickens と Forster の関係が変化する1つの要因となっており、Forster の伝記の中では Collins の扱いが実際よりも小さいと言われている。そのため、Wills を後年の Dickens の一番の友人と書いた背景に、Collins に対する Forster の嫉妬心が働いている可能性は否定できない。しかし、Forster は Collins に嫉妬する一方で、Wills のことも嫌っていたと考えられ (Davies 113)、あえて Collins の役割を低くするためにここで Wills を一番の友人と述べたとは考えにくい。したがって、後年の Dickens にとって Wills 以上に親しい友はいなかった、という言葉は、ある程度以上正確に事実を述べたものと考えて良いだろう。

欠いていたからこそなのである。

## 2. Wills という男

後年の Dickens にとって随一の友人と呼ばれるような存在になった Wills とは、そもそもどのような人物なのか。本章ではまず Dickens と Wills の交流を概観し、そこから浮かび上がる Wills の人物像について考察したい。両者の交流は 1837 年、Wills が当時 Dickens の編集していた雑誌 *Bentley's Miscellany* に記事を投稿したことに端を発する。次に引用するものは、Dickens から Wills に宛てた最初の手紙であるが、この手紙には後述する Wills の短所がよく現れている。

Mr. Dickens presents his compliments to Mr. W. H. Wills, and begs to apologise to him for the delay which has occurred in returning the inclosed paper, which has been quite accidental. Mr. Dickens would have accepted it with much pleasure, had not so many papers founded on the same idea (translations and otherwise) appeared in our periodical Literature of late years. It is curious that he has by him at this moment no less than three which have been offered for the Miscellany, and the main feature of each of which, is, the very same delusion that Mr. Wills describes.

The little poetic tale pleases Mr. Dickens very much, and he proposes to insert it in the July Number. He will be happy at all times to pay the promptest attention to anything Mr. Wills may send him. (1 : 264-65)

この手紙によれば、Wills は 2 つの記事を投稿し、そのうち 1 つが採用された模様である。Dickens と Wills に関する先行研究では、この手紙は Dickens が

Wills の “little poetic tale” を気に入ったという点、そして、「また作品を送ってくれば喜んで読みたい」と述べたという点にのみ着目されている (Lehmann 3, Spencer 145)。しかしながらこの手紙で最も注目すべきは、採用されたものではなく、むしろ〈採用されなかった記事〉であろう。この記事について Dickens は、「もし同じ考えに基づく似たような記事がたくさんなかったなら、喜んで受け入れただろうに」と述べて、Wills の書いた記事の独創性の欠如を指摘している。この文筆家として想像力・独創性を欠くという点こそが Wills の最大の欠点であり、たびたび Dickens による批判の対象となる点なのである。

この雑誌に掲載された Wills の作品はこの 1 つだけであり、その後約 8 年間、両者には関わりが見られない。その間、Dickens は作家としてますます名をあげ、一方の Wills もまた、*Punch* 誌のスタッフや、*Chamber's Edinburgh Journal* の編集補助などを務め、編集者としての経験を積んでいった。二人の人生が再び交錯するのが 1845 年である。この年、Dickens は新設された新聞 *Daily News* の編集長を務めることとなり、そのスタッフを集める必要が生じた。1845 年 10 月 20 日付の Thomas Mitton 宛ての手紙の中で Dickens はこの件について、「私は今、最良の人材 (the best people) を集めようとしている」(4: 411) と述べているが、その過程で秘書兼副編集長として採用されたのが Wills だったのである。この Wills について Dickens は、翌 1846 年 1 月 9 日付けの Thomas Beard 宛ての手紙で、「とても良い奴だ」(4: 468) と好評価を下している。実際、当時の Dickens の手紙の中には Wills が代筆したものが少なくなく、Wills が Dickens の秘書としてその能力を発揮していることが窺える。

しかし、Dickens はすぐに *Daily News* の編集から身を引いてしまう。そして 1846 年 2 月 16 日付けの、“I miss you a great deal more than I miss the paper” (4: 500) という有名なフレーズで始まる手紙の中で、Wills に事後処理を託している。注目すべきは翌 17 日付けの Wills への手紙である。この中で彼は、“Many thanks for your kind note! I will not hesitate to trouble you one

of these fine afternoons, when I find myself very 'hard up' for assistance” (4: 500) と感謝の言葉を述べている。先に言及した手紙の翌日付であること、また感嘆符付きで感謝の意を示している事から、Wills が Dickens の要請に応じて極めて迅速に対応したということ、そして彼の事務処理能力の高さが読み取れよう。現存する Dickens の手紙を見る限り、当時これほど短い間隔で Dickens が Wills に手紙を送るということではなく、その早さからは Dickens がこの時に Wills の能力に感じ入ったということが読み取れるだろう。Wills は Dickens が編集長を降りた以降も 1849 年まで同紙の副編集長を担当したが、同僚の Joseph Crowe は彼について、“[he] was always correcting manuscript and liked nothing so much as correction” (71) と述懐している。前述の Dickens の感謝の手紙と併せて考えれば、細かい仕事を正確にこなす高い事務処理能力こそが Wills の持ち味と言える。

1849 年、Wills は新たに誕生した Dickens の雑誌 *Household Words* の副編集長として採用される。この人事について Forster は、“Mr Wills was chosen at my suggestion” (2: 80-81) と、Wills の採用は自分の推薦によるものと述べている。しかし、最終的に Wills を雇うことに決めたのは Dickens である。また前述の彼の感謝の言葉や、そこに至るまでの両者の連携した仕事ぶりを考慮に入れるならば、彼が Wills に対して持っていた好意的な印象が、その採用に大きくプラスに作用したことは想像に難くない。実際、Wills は単なる副編集長にとどまらず、同誌の 8 分の 1 の共同経営者となった。この 8 分の 1 という数字は Forster のそれと同じものであり、Wills が Dickens に高く評価されていたことが窺えよう。そしてこの選択は決して誤りではなく、ここから *Household Words*、さらには続く *All the Year Round* と、2 人は良き〈相棒〉として活躍していくのである。

良い意味でも悪い意味でも、Wills という人物の特色がもっともよく現れているのが、同じく *Household Words* のスタッフとなった Richard Henry

Horneの処遇を巡るDickensとの対立である。Horneは*Bentley's Miscellany*や、Dickensが編集をおこなっていた時期の*Daily News*に作品を投稿したことがきっかけでDickensの友人となった人物である。彼は1850年に*Household Words*のスタッフとなったのだが、Willsは彼に対して不満を持ち、Dickensに対して彼との契約を見直すようにと提案する。それに対しDickensは、次のように述べてその要求を拒否する。

I have not the least intention, at present, of making any change in Horne's engagement. I think (as you know) highly of his abilities, and I have always seen him most willing and anxious to work. If, on its being distinctly shewn to him what he is required to do, it should appear, either that he dislikes doing it, or cannot do it, the case would be different. But I do not feel that it would become me to assume any such thing from your premises. (6 : 149)

「そのつもりは全くない」という冒頭の言葉からも、これは完全な拒絶と言って良い。ここで注意したいのは、Dickensがその理由として、Horneの能力の高さをあげているという点である。別の言い方をすれば、DickensはHorneの〈文筆家としての能力〉を高く評価し、*Household Words*の雑誌としての質を高めてくれる存在と考えているからこそ、彼を支持しているのである。

しかし、一方のWillsの見方は異なる。Dickensの手紙に対してWillsは、“What I have proved is merely a matter of business calculation, and should be discussed as such.”(Lehmann 35)と述べて、論点が違うと主張する。Willsによれば、Horneは記事の執筆数が少なく、1本あたり8ポンドの給料を支払っている計算になるという。これは他の執筆者に比べて著しく高い数字であり、全くフェアではないと主張し、最後にこう述べて手紙を締めくくる。

I have nothing special to suggest. All I wish is that Horne should mitigate my occasional agonies for articles by writing more articles—by, in short giving five guineas' worth of services per week in exchange for £5 : 5 : 0. (Lehmann 36)

つまり、彼は雑誌の経営という観点から、Horne の記事の内容と質ではなく、その執筆量を問題にして、彼との契約を変えるべきだと主張しているのである。この報酬（金銭）についての問題は、手紙では少し触れられている程度ではあるが、水面下では Dickens にあてて詳細なデータを送っていたことが窺える。このことから、Wills の優れたマネジメント能力、高い事務処理能力を読み取ることからできるだろう。一方で、Dickens が評価しているように思われる Horne の記事の〈質〉について、Wills は一切考慮していない。ここに、Wills の特徴が端的に表れていると言える。彼の長所は言うまでもなく、特に金銭の問題を中心とした細かい事務処理能力の高さである。彼はどの執筆者がどの記事を書き、それに対していくらの報酬を支払ったか、という記録を詳細につけていた。彼がいたからこそ、*Household Words* や *All the Year Round* は成立し得たと言っても過言ではない。しかし Dickens に対する遠慮があったにせよ、Horne の記事の質については完全に度外視して金銭の問題に拘泥したように、芸術性への配慮は欠けるところがあるように思われる。

実際、Dickens の友人の中で、彼ほどその想像力のなさ、芸術性の低さを Dickens から批判されている人物はいない。たとえば Dickens は友人 Henry Austin 宛ての手紙の中で Wills を評して、“[h]e has not the ghost of an idea in the imaginative way” (6 : 69) と述べてその想像力の欠如に言及するとともに、彼を雇ったのは “business-part” に役立つからだとも述べている。また別の手紙においては、“decidedly of the Nutmeg-Grater or Fancy-Bread-Rasper

School”(6:100) とけなしている。

さらに Dickens は人づてではなく、直接 Wills 本人に対しても厳しい言葉を投げかけている。“A Detective Police Party” と題するエッセイに関して、Wills が “a Night with the Detective Police” というタイトル案を提示してきた際には、“I didn’t think there could be a worse one within the range of the human understanding.” (6:130) と述べて、考えられる中でも最悪のアイデアだときき下ろしている。また別の記事について不満を述べる際には、手紙の追伸として、「ともかく明るくせよ!」(“Brighten it, brighten it, brighten it!”; 7:126) としつこいほどの指示を与えている。こういった例はほかに枚挙のいとまがない。このように、Wills はその高い事務処理能力で Dickens を支え、彼からもその点を評価される一方で、Dickens の目から見て文筆家としての能力は必ずしも高いとは言えず、たびたびその点を批判されるような人物だったのである。

### 3. Dickens と Forster

前章で考察したように、Wills は編集者、あるいは秘書としての高い事務処理能力と、文学者としての低い芸術性(あくまで Dickens から見て、ではあるが)という、明確な長所と短所を併せ持つ人物であったと考えられる。では、なぜそのような人物が、後に Forster によって「彼ほどの友人はいなかった」と言われるまでに Dickens の後半生において重要な位置を占めるようになるのだろうか。本章では次に当初の親友 Forster の人物像を、Wills との対比を交えて検討したい。

広く知られた事実ではあるが、Dickens と Forster が最初に出会ったのは 1836 年の末、「共通の友人 (our common friend)」(Forster 1:75) である Ainsworth の家で開かれたパーティーの席上であった。この時、Dickens と同い年の Forster はすでに *Examiner* 誌の批評家として活躍し、ロンドンの文壇



で名を上げていた。一方の Dickens もこの年 *Sketches by Boz* を出版するとともに、*The Pickwick Papers*、さらには *Oliver Twist* を連載中で、まさに新進気鋭の作家として世に出始めた段階であった。興味深い点は、Dickens が自身に関して最初に目にしたと思われる Forster の批評への反応である。Forster は Dickens が台詞を書いた舞台 *Village Coquette* に対する批評を、1836 年 12 月 11 日の *Examiner* 誌に掲載している。その内容は、舞台そのものに対しては極めて批判的である一方、Boz (=Dickens) その人については肯定的というもので、それを讀んだ Dickens は舞台の音楽を担当した J. P. Hullah に次のような手紙を送っている。

Have you seen the Examiner? It is *rather* depreciatory of the Opera, but like all their inveterate critiques against Braham, so well done that I cannot help laughing at it, for the life and soul of me.

I have seen the Sunday Times, the Dispatch, and the Satirist, all of which blow their little trumpets against unhappy me, most lustily. (1 : 210)

Dickens は、批判的な内容だったにもかかわらず、その批評があまりにうまく書かれていたために、思わず笑ってしまったと述べている。他紙の批判的な批評については「小さなトランペットを吹き鳴らす」と表現していることを考えれば、それらとは一線を画すものとして、この Forster の批評が Dickens に強い印象を与えたことは想像に難くない。Peter Ackroyd も、Dickens にとっては笑いを催させるほどウィットに富んでいるというだけで、ほとんどすべてのことを許せるのであり、彼は間違いなく Forster に感銘を受けていたと指摘している (217)。

このエピソードを、同様に Wills の書いた物を最初に讀んだ際の Dickens の

反応と対比させることで、両者の対称性が明確になる。前章で取り上げたように、Wills が最初に投稿した作品を読んだ Dickens は、そのうち 1 つを採用したものの、もう 1 つはオリジナリティの欠如を理由に不採用としている。つまり、Forster の記事から感じたような強い印象を、Wills の作品からは感じなかったと言えるのではないだろうか。Dickens の目には、文筆家としては明らかに Forsterの方が Wills よりも優れて見えたということである。

その後、Dickens と本格的な交際を開始した Forster は、彼の文学的アドバイザーとして、あるいは出版社との交渉役として、彼を支えることとなる。特に、助言者としての Forster が作品に与えた影響は計り知れないものがある。まず、作品の校正原稿は、Dickens と Forster の両名に送られていたと言われており、Forster が Dickens のほぼすべての作品をチェックし、助言を与えていたと考えられる。その助言の内容は大小様々であったが、物語の本筋と関わる提案もたびたびおこなっている。<sup>2</sup> その中でも最大の助言は、*The Old Curiosity Shop* の女主人公 Nell に関わるものであろう。*The Old Curiosity Shop* は少女 Nell の遍歴の物語であり、最終的に彼女は行きついた村で静かに息を引き取ることとなる。当初 Dickens はこの結末について考えておらず、ネルを死なせるつもりはなかったという。しかし、Forster は彼女を最終的に死なせることを提案し、Dickens はそれを受け入れる形で物語を書き上げた (Forster 1:140)。その結果、作品は大ヒットを収め、アメリカでは作品の続きを待ちわびた人々が最新号を載せた船の到着する港に押し寄せ、「Nell は死んでしまったの?」と叫んだという伝説を生み出すまでに至った。<sup>3</sup> この事例に限らず、この結末は当時一大センセーションを巻き起こしたが、もし Nell が死んでいなければこのような大騒ぎにはなっていなかったであろうことは容易に想像がつく。つま

---

<sup>2</sup> Forster が主にどのような提案を行い、結果として作品がどのような形になったかについては、Davies 169-70 を参照のこと。

<sup>3</sup> この伝説は文学史の本にも掲載されるなど、広く知られたものではあるが、近年は

り、この小説の大ヒットは Forster が生み出したもの、と言っても過言ではないのである。ほかにも Forster による Dickens 作品への助言は数多存在しており、作家 Dickens にとって、Forster の存在がいかに大きなものであったかを窺い知ることができよう。Forster はまさに Dickens の「右腕にして、冷静で抜け目のない頭脳」(“right hand and cool shrewd head”; *Letters* 4: 670) だったのである。

#### 4. 脅威を感じさせる男、させない男

ではなぜ Dickens はそのような〈パートナー〉とも呼ぶべき人物と親密な関係が続けることができなかつたのだろうか？これまで主に考えられてきた理由は2つある。1つは Forster の側から見て、Dickens が若い Wilkie Collins と交流を深めていったため、その Collins に嫉妬したということ (Davis 171)、もう1つは、Forster が結婚を経てリスペクタビリティへの傾斜を強めたため、Dickens 自身がそのような Forster に嫌気がさしたということが挙げられる (Schlicke 247)。確かに、Forster による伝記では Collins が実際よりも軽く扱われており、Forster が Collins に対して嫉妬していたことは十分に考えられる。またこの2つ目の理由に関しても、後に *Our Mutual Friend* で Forster をモデルとして Podsnap という憎らしい人物を生み出したと考えられており、両者の間に溝が生じていたことが窺える。<sup>4</sup>しかし、両者の深いつながりを考慮すればこれだけの理由とは考えにくく、ほかにも理由があったと考える方が自然であろう。

この問題を考察する上で注目すべきは、前述の Dickens と Collins の関係で

---

Pilgrim 版書簡集の編者たちのように、その真偽に対して疑いの目を向ける者の方が多い (House ix)。ただし、そのような伝説が生まれるほど、当時 *The Old Curiosity Shop* という作品が人気を博したことは疑いない。

<sup>4</sup> Forster と Podsnap の類似については、Davies 178–83 が詳しい。

ある。Forster は Collins に対して嫉妬していたと述べたが、晩年の Dickens はその Collins とともに疎遠になっている。そしてその原因に、彼と Forster との関係変化の原因を解き明かす手がかりがあるように思われるのだ。まずは両者の交友の始まりから見ていきたい。Dickens と Collins が初めて出会ったのは 1851 年 3 月のことで、Dickens 主催の素人劇団の上映する *Not So Bad as We Seem* の一つの役を Collins が引き受けたことに端を発する。彼は自分より 12 歳年下の若者の才能を見だし、その前途を広げてやろうと手を尽くした。彼は *Household Words* のスタッフとして Collins を迎え入れ、共同で毎年クリスマス物を執筆した。また続く雑誌 *All the Year Round* においても彼に *The Woman in White* と *The Moonstone* という、Collins の二大著作を連載させた。共同で作品に取り組むにあたり、彼は Wills に対して次のように述べている。

[H]e and I might do something in *Household Words* together. He and I have talked so much within the last 3 or 4 years about Fiction-Writing, and I see him so ready to catch at what I have tried to prove right, and to avoid what I thought wrong, and altogether to go at it in the spirit I have fired him with, that the notion takes some shape with me. (8 : 159)

数年にわたり小説執筆について話し合ってきたということ、そして Collins が自分の言うことをよく理解しているという言葉から、彼が Collins の作家としての才能を高く評価していることが読み取れる。確かにその後の Collins の活躍を見れば、Dickens の目に狂いはなかったと言える。

ところが 1860 年代に入り、両者の仲は微妙なものとなってゆく。特に注目したいのが、*The Moonstone* をめぐる Dickens の手のひら返しである。1867 年の 6 月、同作品の前半 3 連載分を読んだ Dickens はそれに非常に感心し、Wills に宛てた手紙の中で激賞した他、Collins 本人に対しても、「君の作品の

中で最も成功する作品になるだろう」と伝えて彼を喜ばせている（11：385）。ところが、翌1868年にアメリカ旅行から帰国したDickensは、Collinsの*The Moonstone*、さらには彼が舞台化した“No Thoroughfare”が大ヒットをおさめている様を目の当たりにして、突如として態度を硬化させる。彼は再びWillsへの手紙の中で、同小説について、“wearisome beyond endurance”（12：159）と、当初とは全く異なる評価を下す。一方のCollinsの側も、Dickensが続いて執筆した*The Mystery of Edwin Drood*について、“the melancholy work of a worn out brain”（Robinson 236）と酷評しており、両者の関係が変化したことが窺える。この変化について、DickensがCollinsに嫉妬していたという可能性を指摘する批評家や（Schlicke 115）、人種観の違いなどから、両者が互いの作品に対して実際に嫌悪感を持っていたと述べる批評家がいる（Rance 131）。あるいは、Lillian Nayderが指摘しているように、両者の対立の背景に、Collinsの弟Charlesに対するDickensの嫌悪感があったという声もある（164）。<sup>5</sup>しかしDickensの視点で見た場合、両者の対立は単なる嫉妬や嫌悪感、家族への不満だけをその原因とするものではないように思われる。Dickensから見てCollinsは12歳も年下であり、加えて出会った時点ではまだ作家としてのキャリアも短かった。そのため両者の関係は、対等な友人と言うよりはむしろ文学的師弟という趣があった。両者と親交のあったEliza Lynn Lintonは、DickensのCollinsに対する態度を“a literary Mentor to a younger Telemachus”（214）と表現しており、少なくともDickensの側にはそのような意識があったことが窺える。極端に言えば、彼にとってCollinsは上から見下ろす存在だったのだ。ところがその彼が、いつの間にか大きく羽ばたいていたということになる。これは嫉妬とともに、その能力に対する警戒心、

---

<sup>5</sup> Charles CollinsはDickensの娘のKateと結婚したが、病気がちで借金もあり、Dickensは義理の息子として好ましくからざる目で見えていたと考えられている。

さらに言えば、今やライバルとなった彼の力に対する〈恐れ〉があったと考えることができるのではないだろうか。

この〈才能ある人間に対する恐れ〉という視点を取り入れると、彼と Forster との関係の変化の理由もおぼろげながら見えてくる。Collins と Forster は、全く異なるタイプの間人ではあるが、ことディケンズが認めた文学者、という点では一致している。そして、彼は Collins に対して感じたのと同じように、Forster に対しても元々恐れを抱いていたと考えることができるのだ。これまで述べてきたように、Dickens は Forster を信頼し、彼の助言に感謝していた。ところがその一方で、ことあるごとに彼をからかいの種にしていた。Davies は、“Dickens ridiculed no less frequently than he assured his undying regard.” と述べて、具体的な手紙の考察を通して Dickens が Forster を頻繁にからかう様を概観している (174-5)。これは、Dickens が Forster に対して単なる信頼や愛情ではない、複雑な感情を抱えていたことの表れと言えよう。ふたたび Davies の表現を借りるならば、Dickens は Forster に対して “hostile attraction and defensive attack” (176) という微妙な態度を取っていたのである。そして彼にそのような態度を取らせた背景には、山崎勉氏も論じているように、「Forster の力強い存在感に対する Dickens の畏怖の念」(156) が働いていたと考えられるのである。Dickens と Forster の関係は、表向きは親密な交友関係であったが、その実、力を持った文学者同士のぶつかり合いであったのだ。水面下では常に激しいせめぎ合いがおこっていたのであり、少しでもバランスが崩れると、元に戻すことは不可能な関係だったのである。そのような、Forster に対して元々 Dickens が抱えていた複雑な感情が、両者の相違の深まりに伴ってより大きなものとなったために、両者の関係性に変化が訪れたのではないだろうか。<sup>6</sup>

---

<sup>6</sup> 20 世紀を代表する批評家の一人 Edmund Wilson は、Forster をモデルとして生み出されたと考えられている Podsnap について考察し、「今や Dickens は Podsnap を恐れて

Dickens は優れた文学者に魅了され、交友を深めるが、その一方でその力を心の奥底で恐れている。そのため、いかに親しくとも、その関係性にはやがて変化が訪れてしまう。そのような性質の持ち主である Dickens にとって、俄然重要性を増してくるのが Wills なのである。すでに繰り返し述べてきたように、Wills は高い事務処理能力を有する一方、文学者としては高い評価を得られていない人物である。しかしこれは別の言い方をすれば、Dickens にとって彼は、脅威を感じる必要のない友人ということでもある。だからこそ彼は、Dickens との友人関係をいついかなる時でも深めることができたのだ。特に Forster や Collins との仲が変化していく後年に、逆に Wills との仲が深まっていったという事実は非常に示唆的と言えよう。Wills が Dickens の親友となった最大の理由、それは皮肉なことに、Forster や Collins ほど、彼が文学者としての優れた力を持っていなかったためなのである。

## 5. おわりに—理想の友の1つの形

一口に友人と言っても様々な種類の友人が存在する。Dickens にとって、Forster は間違いなく〈親友〉と呼べる人物であった。だからこそ、自身の過去に関する秘密を最初に打ち明けたのである。だが、Forster は Dickens にとって単なる親友にとどまらず、〈畏友〉と呼ぶべき存在でもあった。文学者としての優れた能力を備えているがために、常に警戒心や恐れを抱かせる存在だったのである。Dickens は Forster を信頼し、数々の相談を持ちかける一方で、密かに恐れてもいた。両者の関係は〈信頼〉と〈畏怖〉の絶妙なバランスの上に成り立っていたのである。それが後年、両者の違いがより鮮明なものとなるに連れて徐々にバランスが崩れ、以前の親密さが失われてしまったのである。

他方 Wills は、当初より高い事務処理能力を発揮し、Dickens の信頼を得た

---

いる」と論じている (78)。議論の文脈は全く異なるにせよ、極めて慧眼と言えよう。

人物ではあったが、一方で Dickens の目から見て文学者としての能力は決して高いとは言えず、彼に恐れを抱かせるような存在ではなかった。ある意味において、彼は〈安心できる人物〉だったのである。後年の Wills 宛ての手紙にも、そのことがよく現れている。1862 年 1 月、新年の挨拶として、Dickens は Wills に “I think we can say that we doubt whether any two men can have gone on more happily and smoothly, or with greater trust and confidence in one another.” (10 : 2) という手紙を送っている。注目すべきは、“happily”、そして “smoothly” という副詞の使用であろう。Forster との関係がいかに密なものであったとしても、必ずしもこれらの言葉で表現できるものではなかったことは容易に想像がつく。

Dickens と Wills の関係に関する先行研究の中で、もっとも重要と言える研究をおこなった Sandra Spencer は、両者がうまくいった理由は、「お互いが非常に違っていた」 (“they were very different” ; 145) からだと述べている。これは非常に示唆に富む言葉ではあるが、同時に少し明確さを欠いた表現にも思われる。より正確に言うならば、Dickens と Wills がうまくいった 1 つの理由は、〈ある面で明らかに Wills が Dickens よりも劣っていたため〉なのである。

## 参考文献

- Ackroyd, Peter. *Dickens*. London: Minerva, 1991.
- Crowe, Sir Joseph. *Reminiscences of Thirty-Five Years of My Life*. London: John Murray, 1895.
- Davies, James A. *John Forster: A Literary Life*. Totowa: Barnes & Noble Books, 1983.
- Davis, Paul. *The Penguin Dickens Companion*. Harmondsworth: Penguin Books, 1999.
- Dickens, Charles. *The Letters of Charles Dickens*. Vol. 1. Eds. Madeline House and Graham Storey. Oxford: Oxford University Press, 1965.



- . *The Letters of Charles Dickens*. Vol. 4. Ed. Kathleen Tillotson. Oxford: Oxford University Press, 1977.
- . *The Letters of Charles Dickens*. Vol. 6. Eds. Graham Storey, Kathleen Tillotson, and Nina Burgis. Oxford: Oxford University Press, 1988.
- . *The Letters of Charles Dickens*. Vol. 7. Eds. Graham Storey, Kathleen Tillotson, and Angus Easson. Oxford: Oxford University Press, 1993.
- . *The Letters of Charles Dickens*. Vol. 8. Eds. Graham Storey and Kathleen Tillotson. Oxford: Clarendon Press, 1995.
- . *The Letters of Charles Dickens*. Vol. 11. Eds. Graham Storey, Margaret Brown, and Kathleen Tillotson. Oxford: Clarendon Press, 1999.
- . *The Letters of Charles Dickens*. Vol. 12. Eds. Graham Storey, Margaret Brown, and Kathleen Tillotson. Oxford: Clarendon Press, 2002.
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens*. 2 vols. London: Chapman and Hall, 1876.
- House, Madeline, Graham Storey, and Kathleen Tillotson. "Preface." *The Letters of Charles Dickens*. Vol. 2. Oxford: Oxford University Press, 1969: vii-xiv.
- Lehmann, R. C. *Charles Dickens as Editor: Being Letters Written By Him To William Henry Wills His Sub-Editor*. London: Smith, Elder & Co, 1912.
- Linton, Eliza Lynn. "A Rod of Iron in his Soul." *Dickens: Interviews and Recollections*. Vol. 2. Ed. Philip Collins. London: Macmillan, 1981: 211 – 15.
- Miyamaru, Yuji. "A Private Tragedy Generalized: John Forster's *The Life of Charles Dickens* as a Dickens's Posthumous Work." *Colloquia* 20 (1999): 227 – 40.
- Nayder, Lillian. *Unequal Partners: Charles Dickens, Wilkie Collins, and Victorian Authorship*. London: Cornell University Press, 2001.
- Rance, Nicholas. *Wilkie Collins and Other Sensation Novelists*. London: Palgrave Macmillan, 1991.
- Robinson, Kenneth. *Wilkie Collins: A Bibliography*. London: Davis Poynter, 1974.
- Schlicke, Paul. *Oxford Reader's Companion to Dickens*. Oxford: Oxford University Press, 2000.
- Spencer, Sandra. "The Indispensable Mr. Wills." *Victorian Periodicals Review* 21:4 (1988): 145 – 51.

Tomalin, Claire. *Charles Dickens: A Life*. New York: Penguin Books, 2011.

--. "Charles Dickens: the best of men, the worst of men." 2 March 2012. Lecture.

Wilson, Edmund. *The Wound and the Bow*. Cambridge: Riverside Press, 1941.

山崎勉. 『ディケンズのこころ』 東京: 英宝社, 2003.